

短期大学における英語教育活動

中島 直樹

1. はじめに

平成 22 年 4 月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く 81 名の短期大学ビジネス総合学科新生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語学力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、新生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B (TOEIC のリスニングに重点を置いた演習) と TOEIC イングリッシュ I C・I D (TOEIC のリーディングに重点を置いた演習) を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12 月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去 8 年間の英語力調査の結果を振り返って

はじめに、平成 14 年度の英語力調査から振り返ってみたい。英語力調査自体は平成 14 年度以前にも実施されていたが、難易度の高い問題であったため、平成 14 年度に基礎力を重視した試験問題を新たに採用し、それを今も継続して使用している。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は 1 時間、全 50 問で 100 点満点の試験であった。93 名が受験し、全体の平均点は

約 56.9 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 1 の通りである。

表 1 平成 14 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67 名	約 57.8 点
現代文化	26 名	約 54.7 点
全 体	93 名	約 56.9 点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 6 名、次いで 75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 10 名、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 7 名おり、その中間に 30 点から 74 点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60 点から 74 点までの上位の層 (26 名) と 45 点から 59 点までの中位の層 (24 名) と 30 点から 44 点までの下位の層 (20 名) とにおおよそ分類でき、この 3 つの層が平成 14 年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に 75 パーセントを超えていた。

次に、平成 15 年度の結果について見てみたい。59 名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約 54.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 2 の通りである。

表 2 平成 15 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47 名	約 55.0 点
現代文化	12 名	約 52.6 点
全 体	59 名	約 54.5 点

平成 14 年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 2.8 点、現代文化学科においては 2.1 点、全体では 2.4 点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが、基本的には 14 年度とそれほど変わってはいなかった。14 年度と違う点は、90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった (14 年度は 6 名) ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30 点から 74 点までの中間層にはいくつかの山があったことが 14 年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして、14 年度は 60 点から 74 点までの上位の層に 26 名、45 点から 59 点までの中位の層に 24 名、30 点から 44 点までの下位の層に 20 名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生

数も多かったが、平成 15 年度は上位の層に 16 名、中位の層に 17 名、下位の層に 17 名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、平成 16 年度の結果について検討したい。43 名の新入生が受験し、全体の平均点は約 50.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 3 の通りである。

表 3 平成 16 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33 名	約 50.5 点
現代文化	10 名	約 50.4 点
全 体	43 名	約 50.5 点

平成 15 年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 4.5 点、現代文化学科においては 2.2 点、全体では 4.0 点下がった。平成 14 年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。この傾向はデータを採りはじめた平成 12 年度からずっと続いていた。

全体の得点分布は基本的には 15 年度とそれほど変わっておらず、15 年度をほぼ継承していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもなくなったことも、中間層の形が逆転したことも 15 年度と同様であった。それに加えて、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 5 名となり、前年より 3 名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層に 13 名の学生がいた。平成 14 年度までは、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成 15 年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成 16 年度も続いていた。

次に、平成 17 年度の結果について検討したい。80 名が受験し、全体の平均点は約 56.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 4 の通りである。

表 4 平成 17 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57 名	約 56.9 点
現代文化	23 名	約 55.5 点
全 体	80 名	約 56.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 6.4 点、現代文化学科においては 5.1 点、短大全体では 6.0 点上昇した。平成 12 年度から短大入学生の英語力調査のデータを採っ

ているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。数値的に見て、平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になった。90点以上のかかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが変わった。

次に、平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 平成18年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが、18年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であるにもかかわらず、グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、18年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところにあり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がないと考えてよいであろう。90点以上のかかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様である。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名と大差はない。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目につく。つまり、75点から89点までのある

程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、18年度はその層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げている最大の原因であった。

次に、平成19年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表6である。

表6 平成19年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約51.0点

ビジネス総合学科になって2回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られるが、特に大きな変化とは思われない。得点のより低い層により多くの学生が集中するというこれまでの傾向を継承していると言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に12人、45点から59点までを中位の層に18人、30点から44点までを下位の層に22人となっており、これまで通り基礎力のない学生の多さが目立つ。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、昨年の6名から、今年は11名に増加している。ピークは18年度は40～44点のところであったが、19年度は50～54点に移動しており、これらが19年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、平成20年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表7である。

表7 平成20年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約51.0点

受験者数は12名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布グラフの形はわずかに異なっていた。ピークは50～54点と40～44点のところにあり、いずれも10名。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に15人、45点から59点までを中位の層に23人、30点から44点までを下位の層に22人となっており、中位の層が下位の層を1名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85～89点の層

に5名、90点以上のかなり基礎力のある学生が2名いたことも喜ばしいことであったが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（昨年は6名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると昨年並みであった。

最後に、平成21年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約46.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表8である。

表8 平成21年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約46.0点

受験者数は12名減少、平均点は昨年と比べ5点マイナスであった。得点分布グラフの形も当然異なっている。昨年度のピークは50～54点と40～44点のところ（いずれも10名）にあったが、今年度は30～34点のところの下がってきており、12名の学生がここにいる。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立つ。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に14人、45点から59点までの中位の層に14人、30点から44点までの下位の層に24人となっており、やはり下位の層の占める割合が多い。29点以下のほとんど基礎力のない学生も12名おり、昨年と同様に、この層が平均点を大きく押し下げている。90点以上のかなり基礎力のある学生が2名（内1名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

3. 今年度の結果について

今年度もこれまでと同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く81名が受験し、全体の平均点は約53.5点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表9である。

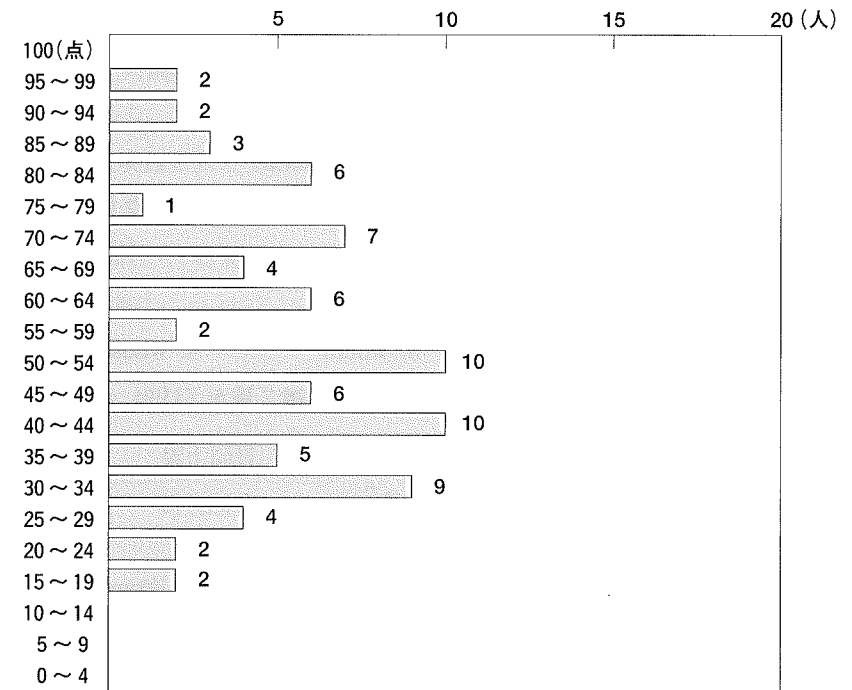
表9 平成22年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約53.5点

受験者数は12名増加、平均点は前年と比べ7.5点上昇であった。前年と比べて平均点が上昇した年は過去には平成17年度と19年度のみであったので、今回が三度目ということになる。7.5

点の上昇は17年度の6.0点を上回っている。平成17年度は奨学金制度を充実させ、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし今年度は17年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが3月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他4年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、今年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。得点分布グラフの形は以下の様になっている。

平成22年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



昨年度のピークは30～34点のところであり、12名の学生がそこにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。今年度のピークは50～54点と40～44点のところの上がってきており、10名の学生がここにいる。第2のピークは下方30～34点のところ（昨年度のピーク）に9名いるが、70～74点に7名、60～64点に6名、両ピーク間の45～49点に6名おり、昨年の下膨れした形とは明らかに違っている。29点以下のほとんど基礎力のない学生は昨年の12名から8名に減っている。90点以上のかなり基礎力のある学生は4名おり、昨年より2名増えている。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は2番であり、正解率は84.1%であった。

(2) A: Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B: Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

次に正解率の高かった問題は37番であり、正解率は81.7%であった。

(37) A: I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B: ()

1. This afternoon. 2. Don't worry.
3. Yes, you can. 4. No, I didn't.

3番目に正解率の高かった問題は10番であり、正解率は80.4%であった。

(10) A: I don't know () Central Park is.

B: It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

正解率が80%を越えたのは以上の3題であった。昨年度は2番が73.9%、37番が66.6%、10番が79.7%であった。

反対に、最も正解率の低かった問題は26番であった。

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

これも正解率は15.8%で、75%の学生が3と解答していた。

次に正解率の低かった問題は18番であった。

(18) If it () tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

正解率は20.7%であった。半数近くが1を選んでいった。be動詞がないのに主語itの後ろに直接形容詞をつなげたり、ing形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。

次に正解率の低かった問題は35番であった。

(35) A () of children are playing in the park.

1. number 2. center 3. middle 4. way

正解1を選んだ学生は28.0%であり、3割の学生が3を、2割前後が2と4を選んでいった。

次に正解率の低かった問題は15番であった。

(15) I just bought a new swimming suit. Now I'm ready () summer.

1. for 2. along 3. at 4. on

34%の学生が4を選んでおり、29.7%しか正解1を選ばなかった。3人に1人もbe ready forを知らない。

正解率が30%以下だったのは以上の4題であった。1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、今年の学生は昨年と比べてかなりよくできていた。しかし基本的な文法・語法が弱く、中学校レベルでつまづいている学生がまだまだ多いという現状が明らかになっている。

5. 1月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、1月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目(4月実施)と第2回目(1月実施)のテストの平均点と得点差をまとめたものが表10である。

表10 英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約53.5点	約57.3点	プラス3.8点

第2回目(1月)は74名が受験し、平均点は57.3点で、第1回目より3.8点上昇した。20年度が1.7点の上昇に留まり、昨年度はプラス4点とかなりの上昇であったが、今年度も満足できる上昇率であった。もちろん得点を下げた学生もいるが、多くは得点を上げており、今回は100点満点も1名いた。29点以下のほとんど基礎力のない学生も8名から1名に減っており、グラフの形も得点上位の層が多くなる形に修正されている。

また、今年度も、12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストや外部のTOEICテストを受験するように指導し、短大1、2年生59名が受験した。全学との比較は次の表11の通りである。

表 11 第 4 回 TOEIC IP テスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	59 名	247.5 点
全学 (短大含む)	387 名	305.2 点

短大を含む全学で 387 名が受験し、平均点は 305.2 点であった。短大の平均点は 247.5 点であり、昨年の平均点を 12 点上回っている。短大の最高点は 545 点（外部受験）、300 点以上の学生は 12 名（外部受験含む）であった。TOEIC400 点を目指して授業をやってきたが、今年度も目標を達成することができた。

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成 14 年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14 年度：56.9 点、15 年度：54.5 点、16 年度：50.5 点と年々下降の一途をたどり、17 年度に 56.5 点といった上昇に転じたが、18 年度に 48.3 点と大きく下げ、19 年度：51.0 点、20 年度も 51.0 点と戻したが、21 年度は過去最低の 46.0 点となり、今年度は 53.5 点であった。今年度は何とか上昇したが、評定平均値の高い学生が多く入学した平成 17 年度を除いて、平均点は段階的に年々低下していると思えるべきであろう。昨年度で下げ止まりしたとも思われるが、来年度に向けて特に明るい材料もなく、再び下がる可能性もあろう。とは言え、短大で 1 年間基礎をしっかりと学んだ者は着実に実力アップを果たしている。数字にもはっきり表れている。我々にできることは、たえず基礎を確認しながら授業を行い、全体的な底上げをすることだと思う。また同時に、ある程度基礎力のある学生に対して実力を伸ばせるような指導方法も求められていると思う。

TOEIC については、400 点の学生を出すことを目標に授業を行ってきたが、これについては目標を達成することができた。300 点以上が 12 名おり、全員が 1 年生であるので、2 年次の英語の授業で更なるスコアアップを目指して指導していくつもりである。